佐賀藩勘定所大目安享保10年度1725－安政4年度1857のメタデータ集合記述

安澤　秀一

Collective Description on Metadata for *SAGA-HAN KANJOSHO OMEYASU*

(The Financial Annual Reports on the Accounting Section in SAGA-HAN, 1725～1857)

Shuichi YASUZAWA, Dr.

概要

江戸時代の九州鍋島家佐賀藩にかかわる膨大な藩政史料（鍋島報效会）が佐賀県立図書館に架蔵されている。その一つに「御物成并銀御遣方大目安」という藩財政における収入支出（通常・臨時）を記述した年度別収入支出勘定帳簿百年分（うち96年分連続）が存在している。これを翻刻してデジタルテキスト化（7ＭＢ）し、また年度毎の収入支出対照表（８ＭＢ）に転換させた。さらに収入や支出を構成する勘定項目について時系列分析を可能にする125年連続の数値表（５ＭＢ）に組み替える作業も行った。作成したデータセットを「佐賀藩勘定所大目安」と名づけた。このデジタル化作業を実施していく中で、この勘定所大目安というデータの塊についてのメタデータを抽出し、百年分についての集合記述を試みた。またフルテキストおよび年度毎収支表についての作成手続きについて凡例記述を行った。本報告は、このメタデータ記述がデジタル化されたデータセットの真正性・信頼性・再現性を保証する手立てであることを論ずるものである。

Summary:

Saga Prefecture Library holds massive documents of Saga-Han Government in the Edo period. Among them, there are financial annual reports on the accounting section of one hundred volumes from 1725 to 1857. I accomplished to make transcription and digitization of them in May 2001.

In processing digitization, I have tried to take out metadata elements from the original materials. They are a set of information resources, and I have made a table of collective description for 24 metadata elements chronologically from 1725 to 1857. Also I tried to put explanatory about text file of transcription and structured table on the revenue and expenditure.

My article is the issue that the metadata elements description is one of the means of guarantee on authenticity, reliability and preservation (or representation) on both original and digitized materials.

１．記録史料デジタル化とアカウンタビリティ

江戸時代に徳川幕府とその代官支配所、大名領国の統治機構、そして村々の庄屋、あるいは商人などの手許において、墨・筆・和紙を組み合わせ、文字・数値を手で書き込んで作成され保管された記録史料の数量は膨大な量に及び、今日においてもなお各所で保管されている。これらの記録史料は歴史研究の素材として利用されるばかりでなく、過去に

生きていた人々の**存在証明**となる**社会的集合記憶**の格納庫として保存されるべき記録遺産なのである。また記録史料は広く人類にとって地球上の文化遺産である、という見方が国際的に浸透しつつある。UNESCO, Memory of the World Programme には情報資源としての自然環境だけではなく、情報資源としての人工物も含まれている。

研究者にとって記録史料利用の対象はオリジナルであるべきであるが、オリジナルの損傷劣化を防止する**物理的保存措置**が行われないならば、オリジナルそのものを失う恐れがある。早くから実行されてきた利用手段としての複製製作の手段は手書き（影写・模写)、マイクロ写真撮影、光学的コピー作成などがあった。これらに加えて、デジタル化が始まった。スキャナーで取り込んで映像として保管する方法が普及しているが、手書き文字を読み込んで自動的に活字体の文字に変換させるのは至難のようである。

アナログ記録媒体の場合、書きこむ文字はもとより、情報データを固定化させる手段つまり紙、筆、墨といった伝統的な書き込み用具を始め、光と感光剤、音源と磁気といった塗布媒体そのものの物理的形態を意識に取り込み、それぞれの特性を認知して識別できた。デジタル化とは人間の感性を刺激する**外的物理的特性**を喪失させてしまい、内容だけが電子的記号集合として記録媒体の中に存在するという機械可読性に依存することである。もちろん内容は電子的記号集合のままでは人間に読めないから、ディスプレイになり紙の上になり、入力者の望むような形式で再現しなければならない。

近時、デジタル化推進が各所で叫ばれる際に**アーカイビング**もしくは**アーカイブ**という言葉が盛んに使用されている。デジタル化した対象物を電子的記録媒体のなかに格納する作業を意味しているようである。電子機器出現以前のアーカイブズという言葉の使われ方は、業務遂行の**証拠**として作成され、作成母体によって保管・保存される記録書類の集合体を意味しているのである。アーカイブズ施設では成した行為の証拠として記録書類の**真正性・信頼性・保存性**を保持できるような処理が行われてきた。このことからアーカイブズとは**アカウンタビリティ挙証説明責任**の保障装置であると評価されているが、わが国では挙証という部分を省いたことで、証拠を必要とする意図が失われている。

アカウンタビリティは何ごとかを遂行すれば必ず生じる。アーカイビングに際して、画像などの超精密化が可能になっているとはいえ、オリジナルの持っている固有の特性をどのように記述するのか、またどのようにデジタル化したのかを、アカウンタビリティという視点から明示する必要がある。この報告は記録史料というデータの塊をデジタル化する際に、それがどのようなデータの塊であるのか、どのような手順でデジタル化したのかを明示することによって、私自身のアカウンタビリティを果たそうとするものである。

2．佐賀藩勘定所大目安のデジタル化手順

佐賀県立図書館に膨大な佐賀藩政記録が架蔵されている。以前は鍋島報效会が管理していたものを戦後に移管したという。史料目録が整備されていて利用に便である。その目録に藩財政の記録書類である「**御物成并銀御遣方大目安**」百冊が記載されている。これをデジタル化するにあたって、オリジナルである現物と区別するため、名称を「**佐賀藩勘定所大目安**」とした。デジタル化にあたっては、鍋島報效会および佐賀県立図書館の許諾をいただき、いろいろと便宜を図っていただいた。記して謝意を表するものである。

デジタル化つまりコンピュータへの入力作業はすべて私自身で行った。入力作業を始め

た時と終了時では９年間の隔たりがあったので、パソコンの性能も大幅に向上している。ソフトも入力最後の段階でＯＳはマイクロソフトウインドウズ 98、アプリケーションはオフィス 2000、その上ユニコードによる漢字入力を活用できた。入力作業の最初はマイクロフィルムからのプリントを読んで転写を行い、最終的には県立図書館において現物との綿密な校合を行った。百冊つまり百年分なので１会計年度１ファイルとし、テキストと表の２種類を作成した。テキストのファイル名を「佐賀＊＊＊」、表のファイル名を「佐賀Ｔ＊＊＊」とした。アステリックは 001 から 100 にいたる３桁の番号である。

現物は縦書きであるが、横書きで転写することにした。また数値も漢字で書かれていたが、転写ではアラビア数字を用いた。従来の原文通りという古文書翻刻の慣習に従わず、読み取り間違い防止を優先させたからである。また記入文字に大小の差があるけれど、その違いも表示しなかった。米の秤量単位である石斗升合勺才については石の記入だけとし、合位を小数点で示した。貨幣単位である銀の貫匁分は記入した。原文における誤記訂正についてはその旨を一々注記し、訂正の仕方が分かるようにした。明らかに誤記でありながら訂正されていない場合には、訂正注記に「安澤補」を加えて区別できるようにした。

エクセルによる年度ごとの表作成は、担当役人・収入・経常支出・臨時支出に加えて、数年分に過ぎないが予算決算を入れて、５ワークシートとした。臨時支出ワークシートの支出項目においては一々の事項記述の頭に必ず「臨時／」を付した。収入支出ともに数量単位として米と銀が併用されているので、何れかに換算して一元処理に適した形にしなければならない。そこで毎年の適切な米価を求めて銀表示に換算した。また毎年度の収入支出の各項目について集計値の検算を行い、数値記述の正確さを確認する必要もあった。こうした検証作業を行ってこそ百年という長期かつ大量の確実な数値データが得られるのである。そして検証手順を明示することで、第三者の追検証も確実に行えるようにした。

年度ごとの表形式だけでは様々な数量分析を実施できない。そこで各年度表に分散している各種データを、種類ごとに時系列分析に適した形式に編成しなおさなければならない。一例を挙げれば、「佐賀藩収入分析」ファイルでは「地米除米」「売米額」「石当り銀匁換算値」「収支対照」「収入項目別」という５つのワークシートで構成されている。これらのワークシートは縦軸を年次順、横軸を事項という構成をもたせているから、長期時系列の趨勢を求めたければ、対象事項を選べば直ちに趨勢グラフが描けるのである。

３．佐賀藩勘定所大目安形態書法メタデータの集合記述

百年分もある佐賀藩勘定所大目安という勘定帳簿を一年度１ファイルという形式でデジタル化した。オリジナルの持っている物理的形態と書き込み書法はデジタル化された際に失われ、ディスプレイ上では表示できない。そこで勘定帳簿一冊一冊についてのメタデータと、百年分を一挙に示せるメタデータ集合記述とを提示することが、デジタル化実行者のアカウンタビリティを充足させるために不可欠である。

会計年度分ごとに作成したテキストデータファイルの、それぞれの冒頭にメタデータを記述した。この場合一つ一つのファイルを開かないとメタデータ記述を読みとれない。そこで年度ごとに記述したメタデータを一覧できるように作成した表が「形態書法メタデータ集合記述」なのである。縦の列を年次順とし、横の行に２４のメタデータ要素をならべ、該当欄に情報を記入し、一覧性を持たせた。

とりあげた２４のメタデータ記述要素について説明してみよう。

「年度」は和年号。「閏年」は陰暦使用のゆえに数年おきに出現し勘定月数が一ヶ月増える。「西暦」は和年号対照。「県立図書館目録番号」は原本参照用。「ファイル名」は年度別ファイル識別用。「題箋付き外装」は原本の形態現状。「外装裏と原表紙」は現状と元の形態との接合状態。「原本寸法」とは装丁時の周辺裁断に影響されていない原本縦横寸法。「天」は勘定帳上部の状態。「地」は勘定帳下部の状態、「地小口記述」は勘定帳を平積みにした際に見える書込み。「右小口記述」は勘定帳背中への書込み。「原本綴じ痕跡」は原本を装丁した際に失われた原本の綴じ方状態。「筆跡」は筆による書込み状態。「墨色」は書き込まれた墨色の濃淡状態。「予算額書込」は予算決算額の書込みのある年度。「正銀定銀」は使用される貨幣表示の区別。「勘定方・御目附・元〆役・家老役」は担当役人姓名の書込み有無。「判字記入」とは、控えや写本の場合、正本と違い印鑑捺印がなく、あったことを示す「判」字が添えられる。その添え字の有無。「実収入ー支出計整合性（米正銀定銀）」および「実支出-支出計整合性（米正銀定銀）」とは勘定帳における数値の正確さを検算値と比較した３段階評価。「特記事項」は集約の難しい特徴。

いくつか補足しておこう。予算額が書き込まれているか、いないかは、この記録史料の性質を判断し、また藩の財政政策のありようを探るための情報となる。また正銀・定銀という区別が天保２年 1831 から現れる。正銀とは現物の貨幣を使って計算した場合、定銀とは米価変動の影響を受けず、固定させて計算に使った場合と理解しておきたい。

現在見ている勘定所大目安原本には表紙に「写し」と書き込んであり、その意味では当然、「正本」ではない。江戸時代の藩行政や財務また裁判記録の正本は城内文書蔵というアーカイブズに格納され、そこで保管されている。そして執務現場では写しを保管し、先例つまり過去における書式や処理事例などを参照するために利用される。従って「写し」ではあるが、正本と同じ効力を持っているということになる。

収入支出についての集計数値に整合性があるのかないのかを検証してみた。実収入と支出計の集計値の整合性はほとんどの場合、充足している。ところが実支出と支出計について記入されている集計値と検算値とを比べてみると、整合しない場合がかなりある。合わない場合の理由は様々ある。写しを作る時に何行か書き飛ばしたとか、あるいは記入の際の数値桁違いとか、数値そのものの書き違いとかもある。そのために会計年度によっては支出集計値において検算の結果と整合しない場合が生じる。とはいえこの勘定帳簿の支出記載が全く信頼できないと切り捨てるのではなく、むしろデータ復元の手がかりがここにあるのだと受け止めて、復元の努力を試みるべきであろう。

参考文献

安澤　秀一「エレクトロニックレコード・マネイジメントとメタデータ記述：国際アーカイブズ標準規格策定の基準」情報知識学会第６回研究報告会講演論文集、1998

安澤　秀一「情報資源保管サービス基地としてのアーカイブズ：デジタル化を見据えて」情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジュウム論文集、2000

安澤　秀一『松江藩出入捷覧』（松平不昧伝付録別冊）原書房刊、1999

ICA, Committee on Electronic Records and Alf Erlandsson. "Electronic Records Management: A Literature Review" ICA Studies No.10, 1997